

氏 名	村田 将
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第552号
学位授与年月日	令和3年3月3日
審 査 委 員	主査 教授 村川 洋子
	副査 教授 原田 守
	副査 臨床教授 辻野 佳雄

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis; AD)の全体的重症度の評価にはSCORAD (severity scoring of atopic dermatitis) などの視診スコア、末梢血好酸球数、血清中のLDHやthymus and activation-regulated chemokine (TARC)などの検査データが指標とされている。治療の第一選択であるステロイド外用療法では皮膚局所の病変の程度を評価することが重要であるが、その評価方法は確立されていない。皮膚角質層にケラチノサイトから産生されたサイトカインが含まれ、島根大学皮膚科学教室はテープストリッピング法で採取した皮膚角質層のIL-8量 (IL-8量/総蛋白mg)がAD患者の皮膚重症度と関連していることを既に報告した。申請者らは、この方法で角層中IL-8量が、ステロイド外用療法の治療介入による皮膚症状の改善の指標になるかどうかを検討した。22人のAD患者の治療前後の角層中IL-8量、SCORAD、経表皮水分蒸散量 (TEWL)、角層水分量、血液パラメーターの動向との関連を解析した。その結果、角層中IL-8変化は治療前後で明らかに低下しSCORADと相関することが示された。TEWLや角層水分量の改善との相関は明らかではなかった。従来報告がある血液中のTARC、LDH、好酸球割合の治療での改善度と角層中IL-8変化との相関は軽微であった。皮膚病変局所の状態をより反映するのは角層中IL-8量と考えられる。以上のことから、ADにおける角層中IL-8量測定は治療による皮膚症状の改善の数値による客観的指標になることを明らかにした。また、この方法はADの新規治療法の開発に際しての評価指標にも利用できる可能性を示した。